

かたりべ114

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより



リアル感を出すために荷物をのせて展示しました

唐箕の使い方を解説した映像を展示室で常時流しています

冬の収穫資料展 「目玉」資料はコレダ！

現在、郷土資料館では、冬の収穫資料展を開催しています。「唐箕ってなあに?」、「大八車ではこぶ」、「むかしのくらし」、「くらしのうつりかわり」の四コーナーで構成し、かつて豊島区内の各家で使用された農具や道具類を展示、解説を加えています。ここでは、展示資料の中から、大物二点——唐箕と大八車の紹介をいたします。本誌一〇号巻頭で紹介した唐箕（新しく製作したもの）は、今回初お目見えです（写真中央）。読者の皆さんにとっては、見慣れない農具だと思えますが、かつて豊島区内で米や麦類を生産していた頃には、多くの農家で使用されていたものです。今回、農具の動かし方やその機能がわかるように動画をを用いて解説を加えていますので、「あゝ、なるほど、そういうことか」と、唐箕に込められた知恵と工夫の数々を理解していただけたらと思います。

一方の大八車も初登場です（右写真）。大八車は、一台で八人分の荷物を運べるからとか、大八さんという人が最初に作ったところからとか、その由来には諸説ありますが、いずれにせよ、物資を運搬するための大きな二輪車のことを言います。その歴史は古く、一八世紀前半には江戸の町触でその存在が確認でき、以降戦後しばらくまで使用されていました。展示を通して、豊島区内で収穫された野菜を江戸・東京の市場に出荷するための輸送手段として大八車が使用されていたことを広く知っていただきたいと思います。

なお、来年三月三十一日までの会期中に、大八車を展示室内で実際に動かしたり、豊島区長崎地域での暮らしぶりを題材とした紙芝居の上演、さらに当館の収穫資料として比較的充実しているSP版レコードを手廻し蓄音機で流す試みも予定しています。いずれも郷土資料館のホームページやチラシ類の配布によってお知らせいたしますので、会期中にぜひご来館ください。

（郷土 秋山・福岡）

清戸道の復権（下） 豊島の遺跡 第十三回

前号で「道灌状」の「江戸近所豊島勘解由左衛門尉・同弟平右衛門尉所構対城候之間、江戸・河越通路依不自由…」という記事を紹介しました。この中に、「対城」という用語があります。従来これは「たいのしろ」と読み、豊島氏の本拠とされる平塚城（北区）とともに太田道灌の江戸城に対抗するため石神井城・練馬城を築城したと理解されてきました。

しかし、平塚城に比べ石神井・練馬の両城はいささか江戸城からは離れすぎているように感じます。江戸城に対する対城ならば、もっと江戸城に近い場所に占地すべきであり、このままでは平塚城は孤立してしまいます。従って、この考え方には懐疑的にならざるを得ません。

さて大変興味深いことに、石神井・練馬の二城は清戸道を挟む場所にあり、川越街道からは離れています。当時の連絡路が川越街道だったならば、両城の位置から「江戸城・河越城間の通路が不自由」な状況を作り出すのは難しいでしょう。むしろ、江戸・河越間の連絡路の一部である清戸道を、石神井・練馬の一对の城で挟むと理解したほうが素直です。対城

は、ここでは「ついのしろ」と読むべきだと思えます。そうした目で改めて地図を見ると、石神井・練馬の両城は清戸道のほぼ中間点付近で交差する石神井川に接して築城されており、石神井川の渡河点で清戸道を押さえることを意図しているようにも読めるのです。事実、道灌と豊島氏兄弟が戦った伝江古田原合戦場は、清戸道から直線で千五百mしか離れていない直近の場所です。また、図には示していませんが、江古田原合戦場のすぐ上にある現在の江古田の森公園では、中世前期に遡る寺院とも考えられる遺構が発見されました。清戸道から千m程の所です。清戸道の成立がかなり早い時代に遡ることを示すと考えられます。

時代は少し降りますが、一五二四（大永四）年十月、上杉氏が上野国（群馬県）から侵攻してきた時、江戸城にいた北条氏綱は勝沼城（青梅市）に入っています。清戸道の終着点にある滝の城から青梅までは、現在の埼玉県道一七九号線で真っ直ぐ行くことができます。氏綱軍の移動には、清戸道→「現県道一七九号線」ルートを考えるのが最も合理的です。川

越街道では北に上がり過ぎているのです。清戸道は、起点の文京区関口から練馬区西大泉の四面塔稲荷前へ交差点辺りまではほぼ旧道を辿ることが出来ます。

しかし、そこから新座市・清瀬市に入ると、ルートがはっきりしなくなるようです。図には可能性のあるルートを破線で示しました。この推定ルートに挟まれて野寺（新座市）という地名があります。京都の僧だった道興准后が、一四八八（文明一八）年から翌年にかけての旅の様子を著した『廻国雑記』の中に「音に聞く野寺を問えば跡ふりてこたふる鐘もなき夕べかな」という歌を残しています。そして「此のあたりに、野火とめの塚と言えり塚侍り」という文が続きます。野寺・野火止の地名から、道興准后がこの辺りを歩いたことがわかります。道興准后は、道灌と同時代を生きた人で、その頃、野寺に近い場所に道があったことは確実です。

滝の城・清戸宿は、江戸城から河越城・岩付城（岡城経由）に向かう中継点として要衝の地だったと考えられます。江戸と清戸を結ぶ清戸道は、決して江戸時代起源の田舎道などではなく、川越街道が主役になる以前の重要な交通の動脈の役割を担っていたのです。（郷土 橋口）



写真 区内に残る清戸道（現トキワ荘通り、南長崎三丁目付近）



図 清戸道と周辺の関係遺跡（詳細は前号参照）

「旧鈴木家住宅」の資料たち

第1回 「旧鈴木家住宅」の特徴と軌跡

「旧鈴木家住宅」は、豊島区東池袋五丁目に所在する歴史的建造物で、わが国のフランス文学研究黎明期に活躍した鈴木信太郎の旧宅です（図1・2参照）。豊島区では、この貴重な建造物を二〇二二（平成二四）年三月に豊島区指定有形文化財（建造物）に指定するとともに、改修・整備を行い、「（仮称）鈴木信太郎記念館」として広く公開するための取り組みを進めています。



図1 左手より「座敷棟」、「茶の間・ホール棟」、「書斎棟」

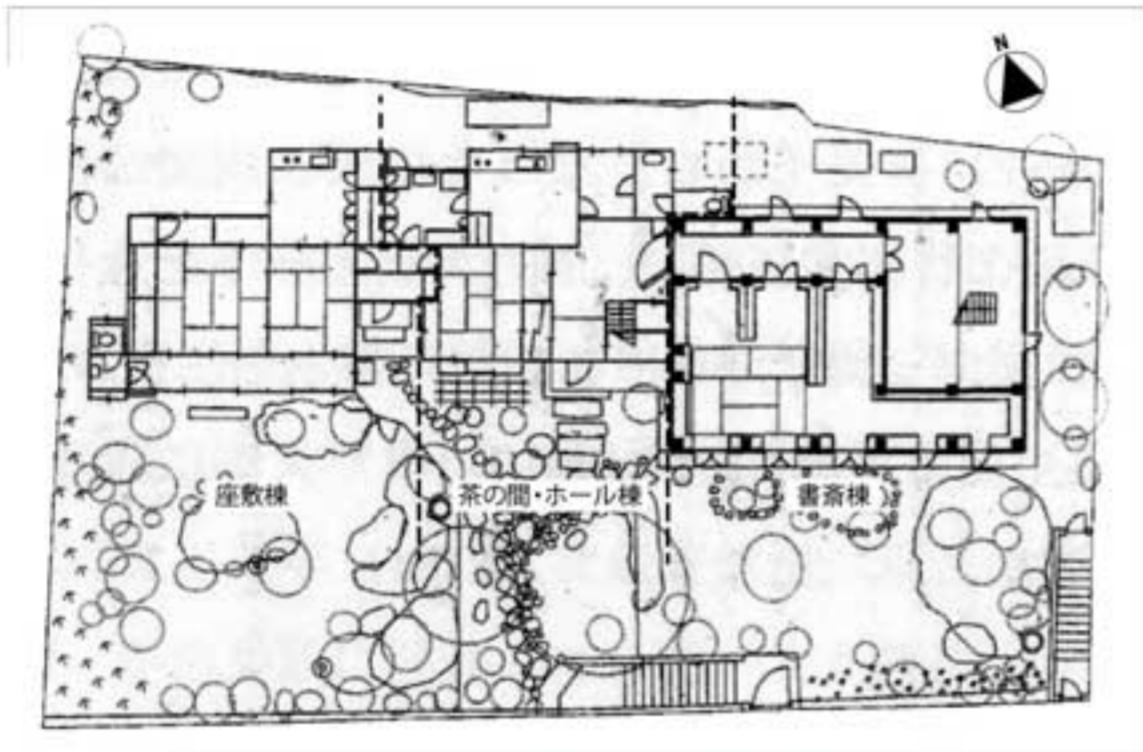


図2 「旧鈴木家住宅」1階平面図

この建物の特徴は、「書斎棟」・「茶の間・ホール棟」・「座敷棟」と呼ばれる建設年代の異なる三棟によって構成されている点にあります。大正時代から平成一〇年代にかけて、家族構成や使い勝手の変化に伴い増改築を行い、住み継がれてきた「旧鈴木家住宅」は、近代住宅史や近代生活史を考える際に貴重なものといえます。また、「旧鈴木家住宅」には、鈴木信太郎が愛蔵した書籍や関連資料、建物の

設計図面や仕様書、見積書といった建築資料も数多く残されています。今回は、建物を構成する三棟の概要を紹介します。鈴木家は一九一八（大正七）年に神田区佐久間町（現千代田区神田佐久間町）から北豊島郡西巢鴨町（現豊島区東池袋）に移り住みました。当初は既存の住宅で生活をしていましたが、一九二一年に二階建ての木造住宅を敷地の西側に新築して生活の場を移しました。

したが、一九三二年に鉄骨造の二階を増築し子供室としました。

一九四五年四月二三日の城北大空襲により、「旧鈴木家住宅」は「書斎棟」の一階部分と二階の鉄骨の梁を残し焼失しました。終戦直後は「書斎棟」の一部に畳を敷いて暮らしましたが、翌年には「書斎棟」の西側に木造平屋建ての「茶の間・ホール棟」を増築しました。この建物は、「臨時建築等制限規則」による一五坪以内という制限の中で玄関、ホール、六畳間、台所、浴室、便所を設けました。

一九二八（昭和三）年には、木造住宅の東側に信太郎の書斎兼書庫となる「書斎棟」を新築します。建物は、フランス留学時に購入した本を船火事で焼失した経験から、火災に強い耐火構造で計画され、当時の個人住宅では珍しい鉄筋コンクリート造で建てられました。「書斎棟」は入口に鉄製の防火扉、窓には防火シャッターを設置する等、耐火・防火への配慮が窺えます。室内には天井まで届く作り付けの書棚が立ち並んでおり、仕事机や椅子、窓上部のステンドグラス等は信太郎自身がデザインをしています。また、建物の奥には二階建ての蔵を設けています。当初は平屋建てで

更に一九四八年には、埼玉県下吉妻（現春日部市下吉妻）の鈴木家本宅から明治二〇年代頃に建設された離れを移築しました。これが「座敷棟」で、移築時に「茶の間・ホール棟」と「座敷棟」の間に内玄関が新設されます。その後、一九五六年に「書斎棟」の二階に再び増築を行い、以降、幾度かの改修を経て現在の「旧鈴木家住宅」の三棟構成となりました。本誌「旧鈴木家住宅」の資料たちでは、「旧鈴木家住宅」に残された資料や建物から、鈴木信太郎の人となりや建物の詳細等を取り上げて紹介していきます。（郷土 木下）

作品を見つめる

3 高山良策

作者がつけたのか、あるいは後世の人々が名づけたのか、作品の題名はいろいろですが、題名がわからないまま現在に至る作品があります。そもそも題名は、作者自身の手によって何か展覧会に出品されたことがわかっていれば、たいていはその時のものが尊重されます。

高山良策（一九一七—一九八二）の作品には、題名がはっきりしないものも多くあります。展示する時になんらかの題名をつけることもあるものの、他の作品の題名がよくよく考えて付けられている場合—たいていはそうなのです—、安直に「命名」することはためらわれます。

そのため、二〇一二（平成二四）年二月に開催した高山良策展①では、《題

不詳》（そのうちの一枚が②）と呼ぶ作

品がたくさんになり、会場で困惑された方もあったかもしれません。そのような場合は、作品をじっくりと見て、何が描かれているのだろうか、と想像するのは楽しいひと時です。稿者は、この入れ子状態、陥入しあう表現は何を描いているのだろうか、細部を見ると山のように見える部分もあるし、高山の他の油彩作品から推測して、赤い円形部分は溶鉱炉のようなものを表現しているのだろうか、と思っていました。

一方で、作者はこういうものを描いていたのか、それが変化してこのようになったのか、とわかる時があります。それは、本人の残した言葉やスケッチブック

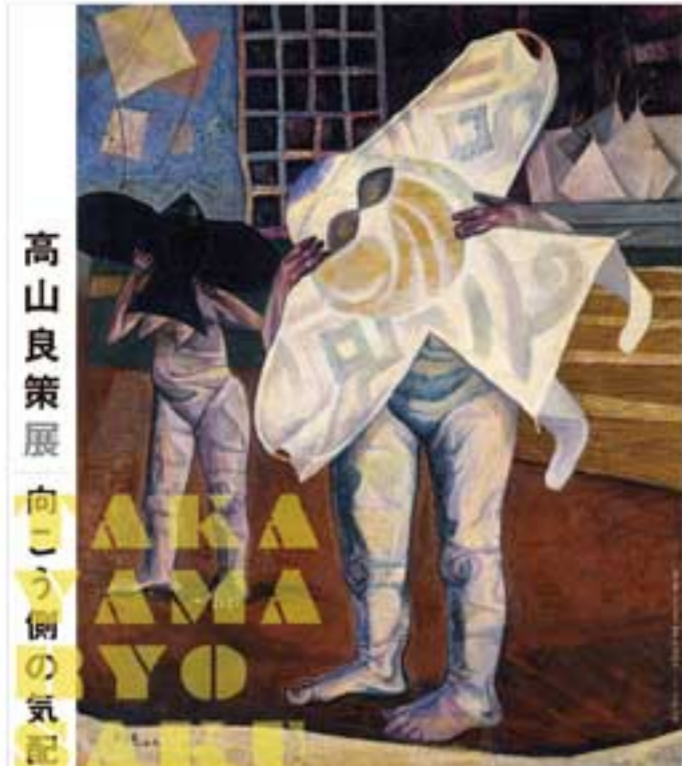
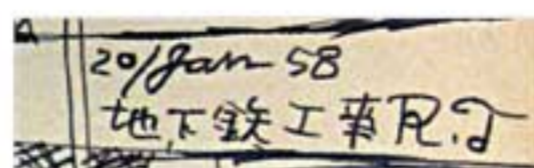
など、周辺資料によることが多いです。高山は大部の作品と資料を残しており、そのスケッチブックの中に、④のように、地上と地下を

描き分けて「地下鉄工事」と書かれているものがありました。一九五八（昭和三三）年の書き込みも見られます。

そうするとこのスケッチは、一九五四年に池袋—御茶ノ水間で開業し、一九五九年には新宿まで開通した丸ノ内線の工事を目にして描いたものかもしれません。さて、このスケッチブックは大変雄弁です。《題不詳》②としてある作品に非常に近い表現③もあれば、たくさんの輪がうかび、上空には楕円形の物体が、眼も想像させて展開している様⑤も見られます。書き込まれた日付から推測すると、地下鉄工事の光景がさまざまに変化・発展している様子がみとれます。これらはわずか一日ほどの間に描かれており、高山の創作の展開の豊かさを感じさせます。

高山作品では、郷土資料館が所蔵する《池袋駅東口》（一九四七年）がなじみ深いものでしょう。加えて高山は、ウルトラマンで知られるウルトラシリーズの怪獣造形に携わったことでも知名度があります。《題不詳》を描いた一九五〇年代後半は、怪獣制作に忙殺される前のひとときだったのでしょう。

これらの作品は、一部、次年度に展示する機会が持てるかもしれませんが、その折にはぜひ、実際の作品を堪能していただきたいと思います。（美術 小林）



高山良策展 向こう側の気配

2012. 2.16 thu—3.4 sun
 会場：熊谷守一美術館 3階4F
 時間：10:00—18:00 (18:00まで入場可)
 観覧料：大人1,000円、中学生以上500円、小学生以下300円
 主催：熊谷守一美術館、熊谷守一美術館協会

①高山良策 向こう側の気配展チラシ 2012年2月開催



②《題不詳》1958年、油彩・板 116.7×91.0cm、豊島区蔵



③スケッチブックより 1958年1月30日 水彩・インク・紙、27.5×21.8cm



④スケッチブックより 1958年1月20日 インク・紙、27.5×21.8cm



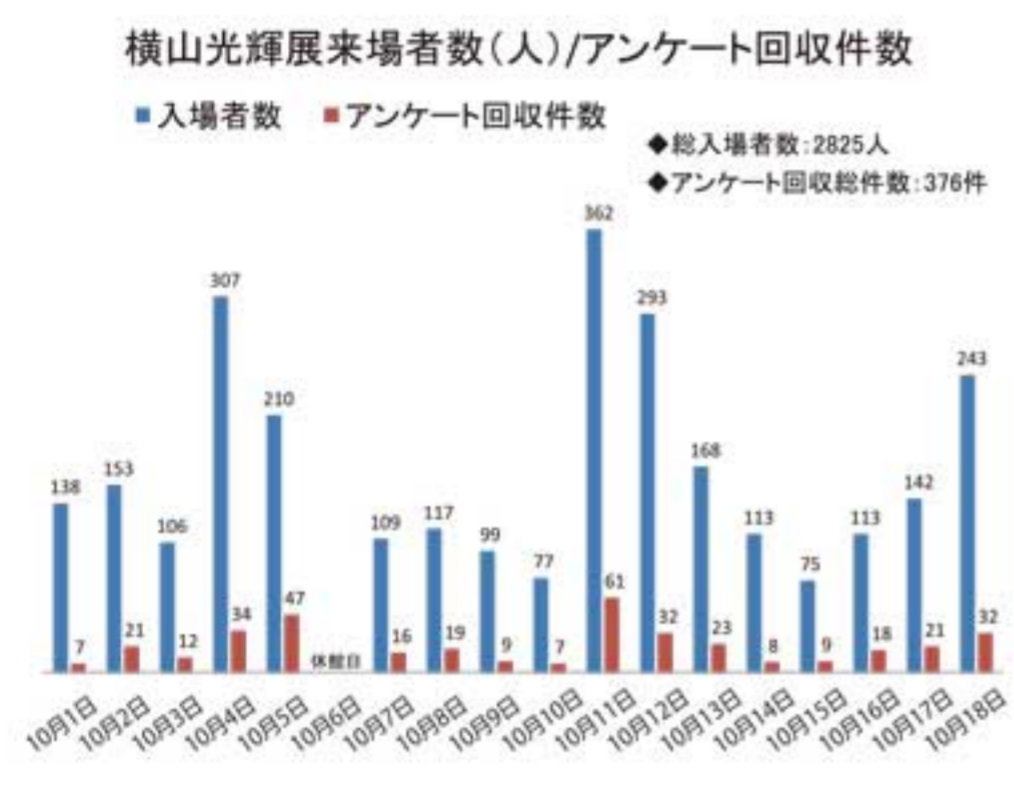
⑤スケッチブックより 1958年1月21日 インク・紙、27.5×21.8cm



企画展 「生誕八〇周年記念 横山光輝」
 「昭和から平成へ マンガの鉄人が駆け抜けた軌跡」 実施報告

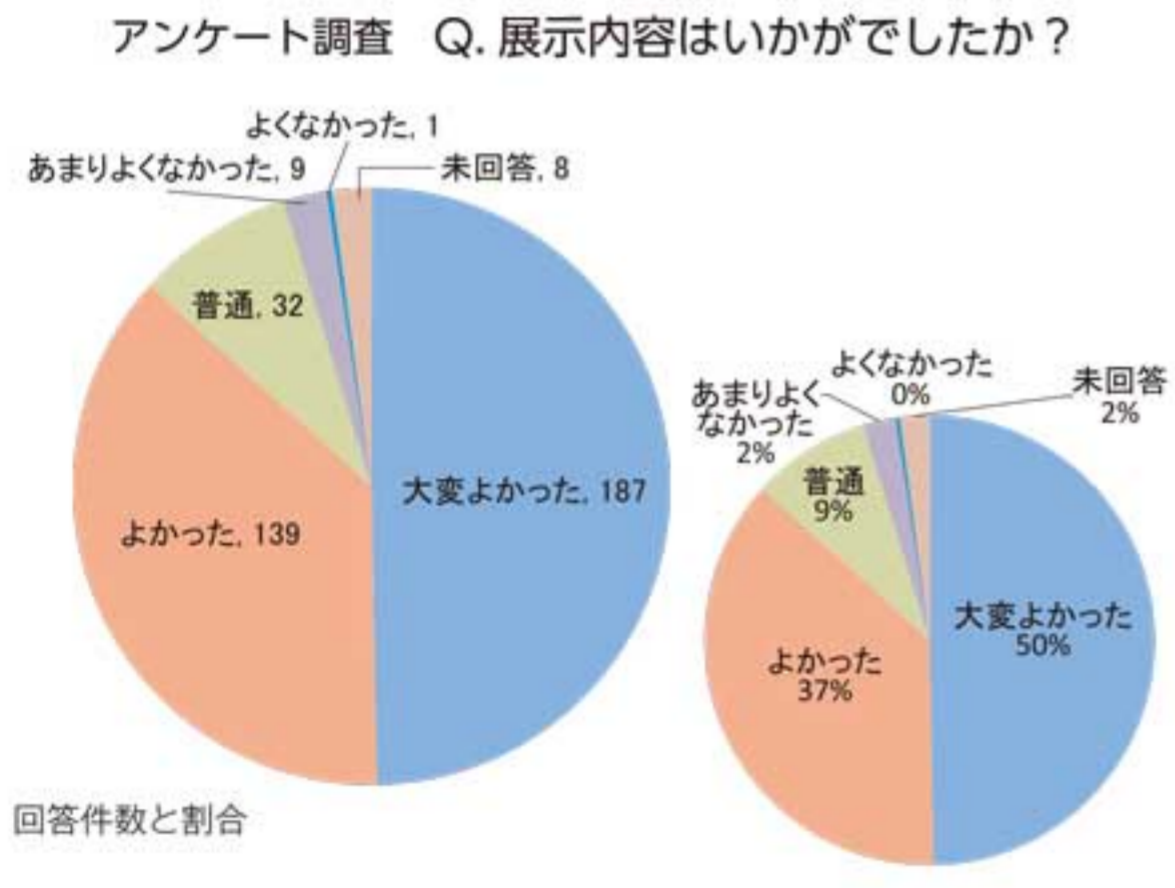
企画展「生誕八〇周年記念 横山光輝」昭和から平成へマンガの鉄人が駆け抜けた軌跡」が、豊島区ミュージアム開設イベント第一回として、平成二六年一〇月一日から一八日まで開催されました。東京芸術劇場五階「ギャラリー2」にて、開催日数一七日間、途中台風二度見舞われるも総入場者数は二八二五人を数えました。来場者は五〇代男性が最も多く、次いで四〇代六〇代が多くなか、二〇代女性の姿が会場内で目立ちました。また、北海道や岡山県など遠方からこの展覧会のためにお越しいただいた方もおり、横山光輝作品の根強く幅広いファン層をあらためて確認することができました。展覧会内容について総括すると、アンケート回収三七六件のうち、全体の約八六%「大変よかった(一八七件)、よかった(二三九件)」の方々が良い評価をいただきました。とはいえ、展示点数を増やして、より分かりやすい展示を求める少数派の意見も真摯に受け止めるべく、これからも多くの観覧者が満足いく展示を目指したいと思っております。

また、展示関連事業については、漫画

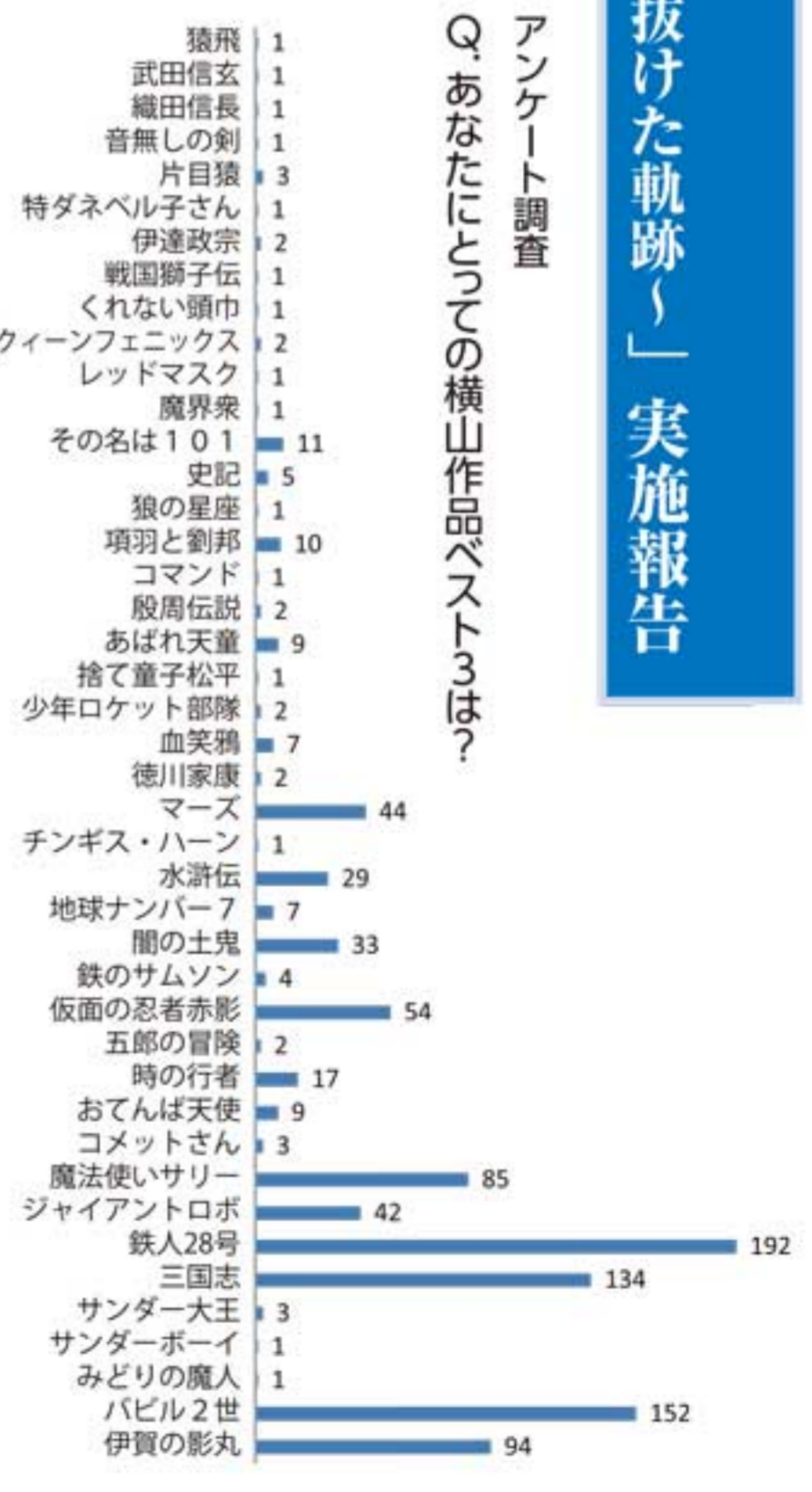


家・漫画史研究家のみなもと太郎氏による横山光輝の作品世界についてのトークイベントや、豊島区立中央図書館と千早図書館との連携による横山光輝書籍紹介展示が展覧会を盛り上げるための名脇役となってくれました。特に、図書館における展示は、若い世代に横山光輝というマンガ家の知名度をアップさせるよい機会になったと思われまます。今後も、豊島区ゆかりの文化や芸術をテーマに様々な形でご紹介していきます。

(文学・マンガ 荒川)



展示室風景



豊島区ミュージアム開設プレイベント 第二回

「豊島ミュージアム講座」がはじまります

豊島区では、旧平和小学校跡地（千早二一三九）に、（仮称）芸術文化資料館と図書館、区民事務所などの機能を備えた（仮称）西部地域複合施設の開設準備を二〇〇八年度より進めてきました。しかし、建築工事費高騰の影響を受け、昨年八月と十一月の二度の入札が不調となり、今年四月、当施設の建設は二〇二〇年の東京オリンピック前後を目的に「凍結」という方針が出されました。

（仮称）芸術文化資料館（以下「新館」と記す）は、郷土資料、美術、文学・マンガの三分野の「連携」と「融合」のもと、区に関わる作品資料の収集と保存、調査・研究、展示、教育普及などの事業を通して、地域の歴史・文化資源を次世代に継承するとともに、その魅力を区内外に広く情報発信し、区民とともに新しい文化価値を創造することを使命としています。新館建設は延期となりましたが、郷土資料分野を担う「郷土資料館」と、美術分野と文学・マンガ分野を担う「ミュージアム開設準備グループ」は、今後も新館の開設に向けて準備を進めていきます（現在の学芸スタッフは、郷土資料

分野五名、美術分野二名、文学・マンガ分野二名、雑司が谷旧宣教師館一名、旧鈴木家住宅二名）。

その一環として、今年度から「かたりべ」を三分野に拡大するとともに、これまで収集してきた作品資料や調査研究の成果を発表する「ミュージアム開設プレイベント」を

日頃の調査研究や所蔵作品資料についてわかりやすく解説する連続講座を開催します。今回は歴史・民俗・美術・文学をテーマにユニークな切り口で豊島区の魅力を紹介します。

来年度も引き続き、企画展や講座を開催していきます。どうぞ御期待ください。

（郷土 横山）

編集後記

「かたりべ」一一四号をお届けしますが、早いものでもう師走となりそうです。郷土資料館では二月二日（金）～三月三日（火）まで冬の収蔵資料展を開催しております。冬の収蔵資料展には、毎年、「古くから残る暮らしにかかわる道具、それを使っていたころの暮らしの様子」について学んでいる、区内の公立小学校三年生が来館します。九歳前後の児童の皆さんにとっては、はじめて学習する歴史的内容であり、私たちも展示を通して、資料を使っていた人々の暮らしや、地域社会の変遷に触れることができるように、工夫を凝らしているのです、小学生はもちろん、大人の皆さまもぜひご来館ください。

四月から新たに始まった、郷土資料館の学芸員がわかりやすく展示を解説する「展示みどころ解説」も、この二月二十七日（土）で、はや十回目の開催となりました。続けて、一月二四日（土）、二月二八日（土）、三月二八日（土）の一四時から開催を予定しておりますので、展示室でお待ちしております。来年も郷土資料館にご支援・ご厚情を賜りますようよろしくお願いいたします。（郷土 甲田）

開催日	講師・テーマ
2月 7日 (土)	横山 恵美 「豊島の川と地形～地図・絵図からさぐる～」
2月14日 (土)	荒川 智子 「豊島区ゆかりの時代小説家 山手樹一郎を知る～代表作「桃太郎侍」の粹～」
2月21日 (土)	小林未央子 「『池袋モンパルナス』より前のこと～田中恭吉について～」
3月 7日 (土)	福岡 直子 「みんな昔は使っていた・見ていた～保管された農具という資料～」
3月14日 (土)	秋山 伸一 「絵画資料・写真資料を読み解く」

- 時間 いずれも午後2時～3時30分
- 会場 豊島区立勤労福祉会館
- 定員 40名 ※全5回出席できる方
- 参加費 無料
- 募集 2015年1月5日(月)～1月23日(金) 必着
- 応募方法 往復はがきに、「豊島ミュージアム講座参加希望」と明記し、①住所、②氏名、③年齢、④電話番号を記入。
はがき持参で窓口申込みも可。応募者多数の場合は抽選。
- 宛先 〒171-0021 豊島区西池袋2-37-4 勤労福祉会館7階 豊島区文化デザイン課ミュージアム開設準備グループ
電話 03-3980-3177

かたりべ
No.114
2014年12月26日
豊島区立郷土資料館
東京都豊島区西池袋2-37-4
豊島区立勤労福祉会館7階
電話 03-3980-2351
URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan>